

書名：ライラとマジユーン

アラブの恋物語

著者：ニザーミー

訳：岡田恵美子訳

出版社：平凡社

出版年月：2006年11月

総ページ数：207ページ

ISBN：4256803947



推薦者

太田直也

鳴門教育大学大学院教授

現代教育課題総合コース

ライラとマジユーンの物語は古くから中東で語り継がれてきたものであるが、ニザーミーによる物語詩は、時、場所、言語を越え、わが国でも秀作として知られている。今日の大学生には馴染のない作品かもしれないが、機会を得て味わってもらいたい。単に悲恋物語と呼ぶにはあまりにも苛烈な物語は、多様な思いを喚起し、時に深い思索へと誘ってもくれるであろう。

本作を知らない人々の興味を減じない程度に物語のあらすじを記しておこう。

アーミル族長の息子カイスは、名門の子弟が集う学院で、「月のように美しい」ライラに出会う。二人は恋に落ちるが、やがて恋に惑溺したカイスは、マジユーン（狂人）と呼ばれるようになる。一方、ライラは家人の監視の下、孤独な生活を送る。カイスは一層深く狂気の世界に沈んでゆくが、その間にライラはカイスへの想いを秘めたまま、他家へと嫁ぐことになる。嫁したとはいえ、彼女は自らの想い人のために、夫に身を任せることはしないのであった。妻の決心を知った夫は、失意のうちに病に倒れる。寡婦となったライラは慣習により喪に服してはいたものの、実際には生氣を取り戻していった。しかし、ほどなくライラも病を得て世を去る。ライラの死を知ったカイスは、墓にすがって号泣し、そこで自らも死を迎える。世間の人々が彼の死を知ったのはそれから1年後のことであった。墓所に残されていた一片の骨はカイスのものと認められ、ライラの墓の傍らに葬られた。

『エロイーズ』や『クレーヴの奥方』を想起する向きもあろうか。ともあれ、物語はひたすら楽しめば良い。素直に作者の術中にはまって、想い人のために狂気を得るカイスや、孤独に耐えるライラの姿に涙すれば良い。「恋は孤悲」などと粹がってみても良いだろう。ただ、この物語を通じて考えることは意外にも多い。私を惹きつけるのは、形相と本質を巡るカイスの言葉だ。

この物語のキーワードらしきものを挙げるとすれば、恋、狂気、孤独であろう。ライラを形容する語が月であること、しばしば月、美、孤独、狂気が一組の連想をなしていることを考慮すれば、この物語は恋の制御不能な恐ろしさを主題としているとも言える。青年を狂気に追いやる女性の恐ろしさを語っていると言えなくもない。しかし、カイスの言葉からは、他の読みが可能となるのではないか。

ライラとカイスの恋が知れ渡った時に、「ライラ・マジユーン」と書かれた紙片が人々の間に出回り、それを手にしたカイスは「ライラ」の部分を作り捨て、言う。「真実の恋を知った者に二つの名は要らぬ。恋の本質は人の目に映らぬもの。私は恋の形相であればよい。この形相のうちに本質が秘められている。ライラは恋の本質、ライラという名はなくてよいのだ」(pp.113-114)と。恋(人の情熱)は狂気と孤独をもって現世を越え本質(真実)との合一を求める、とカイスが語っているとするのは、身勝手な誤読であろうか。

